

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



子ども主導で、母親らとの対話もはずんだ夏休み親子新聞教室。計3日間で約270人が思い思いの新聞づくりに取り組んだ(記事2・3面へ)

巻頭特集

世界に一つだけの新聞作り **夏休み親子新聞教室** 2・3

高大連携 未来の渋谷探る

慶大、東大、渋谷教育学園渋谷高 4・5

読売新聞でインターンシップ 6 日本語検定で「言葉」に強く 7

イノベーションキャンパスinつくば 2017 8 「新聞タイム」のリーフレット完成 9

お知らせ 9 リレーエッセー 仏 ニューヨーク大学パリ校「フランスからビズー (キス)」10

2017.8

Vol.32

世界に一つだけの新聞作り 夏休み親子新聞教室

新聞を切り貼りしてスクラップ作品を作る「夏休み親子新聞教室」（読売新聞社主催）が7月27日、8月18日、19日の3日間、東京・大手町の読売新聞東京本社で開かれた。抽選で選ばれた114組約270人の親子らが参加。東京・上野動物園で生まれたパンダの赤ちゃんや、2020年の東京五輪・パラリンピックなど、思い思いのテーマで記事や写真などを集め、世界に一つだけの新聞作りを楽しんだ。

見出しつけ、感想書き込む

参加した小1から中3までの子どもたちは、秋山純子・本紙NIE企画デザイナーや、新聞を活用した授業に取り組み小学校の3教諭から作品作りのポイントを聞くと、読売新聞や読売KODOMO新聞、別刷りNIE特集「わくわく新聞活用」をめくり、スクラップする記事を探し始めた。

まず気になる記事や写真、広告を切り抜き、レイアウトを工夫しながら専用の用紙に貼っていく。次に蛍光ペンやフェルトペンなどで注目した箇所を色をつけ、タイトルとなる新しい見出しをつけたり、親子で感想を書き込んだりして、個性あふれる作品を作り上げていった。

子どもたちが作品作りに取り組む間、秋山NIE企画デザイナーと指導教諭が会場を回り、「新聞をめくりながら目に飛び込んできた記事に注目して」「見出しや写真だけ貼りつけても大丈夫」などとアドバイスした。

最後に、6組の親子がステージに上がり、子どもたちが元気よく作品の意図や感想などを発表した。子どもと話し合いながら作品作りを見守った親たちからは「子どもが意外な方面に興味があることが分かり、新たな発見があった」などの感想が聞かれた。

出しをつけたら、親子で感想を書き込んだりして、個性あふれる作品を作り上げていった。



親子がじっくり向き合う機会に



朝刊紙面をつなげ、その情報量の多さも知った

▶ステージでの発表

様々な生き方に出会える

秋山純子

本紙NIE企画デザイナー

新聞の朝刊には、20万字もの情報が詰まっています。アナウンサーが読むと11時間もかかりません。そんな新聞を読めば、知らないことにたくさん出会えます。子どもは知らなかったことを知ると、大人に近づいたような気がするものです。

18歳から選挙権を持つことになり、どんな大人になるかが今まで以上に問われるようになりました。新聞を読めば、様々な生き方と出会えます。その積み重ねで、読む力、書く力、話す力、聞く力も知らないうちに身に付きます。親子で楽しみながら取り組ましましょう。

親子で楽しみながら取り組ましましょう。

指導教諭の実践例

●週1切り抜きタイム

東京都北区立滝野川小学校

水木智香子 教諭

「朝読書」のうち毎週1回15分を「NIEタイム」として、1年生から6年生まで全員が新聞を読んで好きな記事を切り抜き、感想を書いている。1年生は、好きな写真を選ぶ。子どもたちは、限られた時間内に記事を読み感想を書くことを続け、自然に「書く力」がつく。選ぶテーマは、サッカー選手や

●首相の1日注目

茨城県つくば市立高崎学園中学校

工藤二三子 教諭

東日本大震災の翌日の新聞や稀勢の里の横綱決定号外などを持っている。「首相の1日」の新聞記事を何日分かまとめて授業で見せたら、生徒たちの感想は「プライベートがない」「すべて監視されているみたい」だった。定期テストでは、新聞を使った問題を出す。全国学力テストでも、新聞に関係した問題が出る。新聞を読む力をつけ、考える子に育ててほしい、と思いつながら教えている。

藤井四段に刺激



東京都江戸川区・小4
安岡蒼太 君(9)

藤井聡太四段から刺激を受け、ひと月前から将棋を始めた安岡君が取り上げたのは、「藤井四段の将棋の世界」。棋譜を使って「角行(かくぎょう)」の使い方のうまさ解説した記事を切り抜き、「藤井四段はすごいと思った。もっと強くなりたい」と感想を記した。将来の夢はプロ棋士。母親の留美さん(45)は「将棋という漢字を上手に書けたことに感心した」とうなづいた。



見出しから興味



東京都新宿区・小6
本堂琉泉 さん(11)



記事の見出しに引きつけられ「デフリンピックって何だろう」と思った。聴覚障害者の国際スポーツ大会で、身体障害者のパラリンピックとの違いもわかった。「新聞は内容が難しいと思っていたが、パラパラめくって意外に読めた」。母の絵美子さん(44)は「親子で意見が食い違うこともあるけれども、今日は切ったり貼ったり、協力できてよかった」と目を細めた。

10代活躍の時代



東京都青梅市・中1
新井珠貴 さん(12)



ふだんから新聞を読んでいて、最近の10代には「すごい人たちがいる」と注目していた。ところが、当日用意された新聞からは「思うような記事がなかなか見つからなかった」。それでも将棋、陸上、バレエなどを探し出し、小学2年から続けている習字で「活躍する若い力」と見出しをつけた。母親の玲子さん(43)は「昨年に続き2回目なのでうまくいったのでは」と笑顔を見せた。

「使える英語」大切



川崎市・中2
牧野末央 さん(13)



英語が得意な牧野さんが集めたのは、英語教育の現場をルポした本紙連載「教育ルネサンス」。「中学受験に英語の科目が増えるという記事にはびっくり」とコメントをつけた。「正しい」ではなく「使える」英語を」と記したサブタイトルは、「普段自分が考えていることを言葉にした」。母親の明日香さん(40)は「将来は英語を使う職業に」と期待を寄せていた。

花の写真集める



千葉県松戸市・小1
橋口希実 さん(7)



最初はテーマ選びに悩んだが、「きれいな花を集めてみた」。花火を含めて花の写真11枚を集め、中央に虹のイラストを描いてまとめた。「大きな花を見つけることが出来た」と満足そう。兄の浩太郎君が「絵をいろいろと描き足して、気持ちを表現した」と優しく言い添えた。母のめぐみさん(47)は「新聞作りを一緒に楽しめた。お兄ちゃんが、よくアドバイスしてくれた」とほほ笑んだ。

音を奏でる喜び



東京都目黒区・小4
上石奏 さん(10)



動物の記事を探していたが、ピアニストのインタビューに目が留まった。好きなピアノ、同じ「奏」という名前。テーマを「音楽」にして、色とりどりの枠の中に丁寧な字でコメントを書き込んだ。「色遣いが難しかったけれど思ったよりもよくできた」とにっこり。母親の青季(あき)さん(38)は「一緒に読むうちに「伝える」「引き出す」というキーワードを見つけれられてよかった」と話していた。

高大連携 未来の渋谷探る

高校生が大学のサポートを受け、未来の渋谷の街づくりを考える「高大連携プログラム」の成果発表シンポジウムが7月23日、横浜市で開かれた。高校と大学の垣根を越えた110日間にわたるプログラムは、慶応大学、東京大学、渋谷教育学園渋谷高校（東京都）の間を読売教育ネットワークがつないで実現した。先進的な取り組みをレポートする。

慶大、東大、渋谷教育学園渋谷高 シンポで成果発表 読売教育NWがつなぐ

横浜市の慶応大学・日吉キャンパス内の会議場。約100人の参加者の前で、渋谷高の20人の生徒5グループが、4か月近く取り組んだ研究成果を20分にまとめて発表した。どのチームもふんだんに映像資料を取り入れ、語りもすっかり前を見てよどみない。この日のために繰り返し練習してきた様子うかがえる。

5チームの共通テーマは「未来の渋谷を魅力ある街にしよう」。うち2チームが、2020年の東京五輪・パラリンピックを意識して、外国人観光客の利便性向上について発表した。

「渋谷は坂が多く道が狭い上、休日の昼間は人が多くて私たちでも歩きにくい。小さい子ども連れの親はもっと大変のはず。そこで提案するのが移動式託児所『しぶたび』です！」

アニメに合わせて、親子連れを演じる生徒たちがマイクでセリフを入れながら、巡回バスを応用した託児所システムを説明した。バス内の子どもの様子を親がスマホで確認できる仕組みや、緊急時の避難場所も考え抜かれ、説得力あるプレゼンテーションに大人の聴衆もうなずいていた。

「渋谷ですしが食べたい」と思っている外国人が多いことを街頭アンケートで知ったチームは、駅周辺のすし店25軒に足を運び、外国人の視線で使いやすいさを分類した英語表記マップを作り、ウェブ公開した。

Theme 3 渋谷ですしを食べたい外国人向けのガイドマップがあるという便利

Shibuya Sushi Companion

渋谷駅周辺の25店を現地調査。外国人のニーズ別に分類したマップを作ってウェブ公開

Theme 4 飲料水と並んで重要なトイレ用水を、災害時にどこから確保するか？

災害時の生活用水確保

防災をテーマにしたチームは、災害時の生活用水を学校のプールから確保することを提案、衛星画像データやGIS（地理情報システム）を駆使して渋谷区内の用水カバー率を見やすくマップ化した。発表を聞いた他県庁の職員は、「自治体でもこれほどのマップは作っていないのでは」。

プールの水を使うことを提案。衛星画像で区内の学校プールを調査してカバー区域をデジタルマップ化



自作した「渋谷駅乗り換えアプリ」を慶応大の中国人留学生（右）に試作してもらった

Theme 2 駅構内の英語表記だけでは外国人の電車乗り換えが不便

外国人が迷わない渋谷駅

複雑な渋谷駅構内で、外国人が乗り換えしやすいう画面で案内するスマホ用アプリを開発したチームは、慶大と東大の留学生に実際に使用してもらい、効果を検証しつつ改良を重ねた。

写真画像と矢印で30通りの乗り換えに対応できるスマホ用アプリを試作。オフラインでも利用できる



「渋谷駅の乗り換えはありますか？」。外国人観光客に英語で直撃インタビューする生徒たち

Theme 5 「ゴミ箱を増やすのは環境的に困難」「ゴミ袋配布も効果が薄い」といった声

竹下通りの環境美化推進

原宿・竹下通りの環境美化に取り組んだチームは、ゴミ箱を増やす、通行人にゴミ袋を配るなどの方策を検討した後、結局はポイ捨てする人の意識に訴えかけることが効果的と結論。ポイ捨て名人「ポイスター」と命名し、「Youはポイスターって知ってるかい？」とラップ風の「注意喚起ソング」を披露して会場を沸かせた。「原宿竹下通り商店会で実際に流してもらえよう、さらに曲を改良します」と生徒たち。

ポイスターを減らすための「注意喚起ソング」を作詞作曲。竹下通りで流してもらおう交渉中



メンターの大学院生から地理情報システムの扱いを学んだ

● プロセスの大切さ学んだ

110日間の高大連携プログラムを通じて、生徒たちは何を学んだのだろうか。

「学校でもプレゼンテーションをやる機会が多いけれど、今回のように仮説を立てて、フィールドワークで検証して、仮説が正しくなければやり直して……という経験は初めて。プロセスの大切さを学んだ」と春山友里さん（2年）。「人工衛星の情報を使って社会問題を解決できることに興味を持った。将来はそちらの方向に進みたい」と山崎隼さん（同）。

多くの生徒が「大学に対するイメージが変わった」と口をそろえた。「メンターは先生というより、対等なメンバーのように接してくれた」と矢野美晴さん（同）。そんな声に対し、メンターの小高暁（あきら）さん（33）（慶応大大学院研究員）は「楽しみながらフィールドワークをする生徒たちの姿を見て、僕も忘れていた初心がよみがえった」と笑顔で語っていた。

今回のプログラムは高校生に大学院レベルの学びを体験してもらうことが目的だったが、「高大連携には課題もある」と神武准教授。「大学が受け入れ可能な高校生の数には限りがあり、メンターの負担も大きい。しかし今回の取り組みはラーニング・バイ・ティーチングで、教える側のメンターたちも学びを得られた。こうした試みを継続することが大事」と強調した。

● 教授、大学院生らに励まされ

学習意欲の高い高校生のために、高校と大学が柔軟に接続して新しい教育を目指すのが高大連携だ。プログラムの開始は4月初め。選考で選ばれた1、2年生の20人をチーム分けして一度テーマを決めたが、狙いが漠然としていたり、調べると単なる思い込みだったりして、途中でテーマ変更を余儀なくされるチームが続出。学校外活動のため、使える時間は放課後か週末のみ。「本当にきちんと発表できるんだらうか」と弱音が漏れる時期もあった。

そんな生徒たちを励まし伴走したのが、柴崎亮介・東京大学教授、神武（こうたけ）直彦・慶応大学准教授と、両大学の大学院研究員、大学院生らだった。全員が宇宙技術・地理空間技術の専門家で、海外経験も豊富。メンター（指導者）として生徒たちにGISの基本を教え、フィールドワークで共に汗を流し、発表まで一緒に内容を練り上げた。「彼らにも研究があるのに、毎日のように高校生に寄り添ってくれた」と神武准教授はその苦勞をねぎらう。



神武直彦 慶大准教授



シンポジウムで英語版「渋谷すしマップ」を発表

仮説、検証、やりなおし……大学院の学び経験

衛星データ 未来変える

柴崎 亮介 東大教授

グーグルマップやスマートフォンの位置情報システムがわかりやすい例だが、地球観測衛星、測位衛星、通信衛星のデータが、世界のどこにいても使える時代になってきた。宇宙には国境がない。ここ数年で衛星から取れるデータはどんどんリアルタイム化しており、さらに進歩するだろう。衛星データの社会インフラ活用は途上国の方が積極的で、ベトナムやタイでは法律ですべての商業車にGPS（全地球測位システム）装着が義務付けられている。また、農業でも、気象衛星のデータを活用して最適な作付けシミュレーションを行う企業が現れた。

AI（人工知能）が囲碁の世界を変えつつあるように、こうした技術は社会を変える可能性を秘めている。いろいろ面白いことができるんじゃないかというのがG-SPASEプログラムの目的だ。今回は高校生のみさんにもご参加いただいた。未来にどんなフロンティアが広がっているのか、一緒に体験したい。



G-SPASEプログラム

人工衛星や携帯電話など宇宙と地上のインフラを統合し、様々な社会課題を解決できる人材を育成する国際教育プログラム。文部科学省委託業務で、慶応大、東京大など5大学が中心となって活動。今回の高大連携はこのプログラムの一環で、実施は2016年度の開設高校（東京都）に続き2回目。



神宮球場のカメラマン席で高校野球の試合経過を見守る立川国際中等教育学校の生徒たち

東 京都立立川国際中等教育
学校からのインターンシ
ップは、昨夏に続いて2回目。
大西望美さんら4年生（高一）
の女子4人が、3日間のプロ
ラムを体験した。

読売中高生新聞には、読売新
聞朝刊一面の「編集手帳」と同
じスタイルでコラムを書いて投
稿すると、「編集手帳」執筆者
の竹内政明論説委員が優秀作品
2点を選び、添削付きで掲載さ
れる「練習手帳」という欄があ
る。4人は8月のお題「藤井四
段29連勝」であらかじめ「練習

手帳」を書いてきており、イン
ターンシップ初日に中高生新聞
の石間俊充編集長と増田知基記
者が講評した。このうち石間編
集長が「自分の体験が入ってい
て、ぐいぐい引き込まれた」と
評した金知珠さんの作品は後
日、竹内論説委員の目にも留ま
り、8月4日付の同紙に掲載さ
れた。

2日目には、吉田拓矢記者の
指導で高校野球西東京大会を取
材。神宮球場の記者室で早実の
清宮選手に遭遇し、「選手との
距離が近い」と感激していた。

日大三高と東海大菅生
の試合終了後には、選
手や監督にインタビュ
ーする新聞やテレビの
記者たちに混じり、メ
モを取った。それらを
もとに記事を書く宿題
が出されたが、4人と
も翌日までにしつかり
書き上げてきた。

最終日はちょうど中
高生新聞の校了日に当
たり、紙面が編集室か
ら校閲部、編集部を経
て印刷工場で印刷され
るまでをつぶさに見
学。「一つの新聞を作
るのに、多くの人々
が協力している」と
驚いた様子だった。

高校野球
を取材

東京都立立川国際中等教育学校

読売新聞でインターンシップ

首都圏の中高生計10人が夏休みに、
読売新聞東京本社（東京・大手町）の読売中高生新聞編集室や
教育ネットワーク事務局でインターンシップを行った。

「顔」に
挑戦

千葉県浦安市立美浜中学校



インタビューしながら
交代で写真も撮る
美浜中学校の生徒
たち

① 方、千葉県浦安市立美浜
中学校からは初のインタ
ーンシップ。三ツ朱音さんら2
年生の女子6人が2日間のプロ
グラムに臨んだ。

初日は、時代を映す新聞広告
について、教育ネットワーク事
務局の川瀬史朗部長から説明を
受けた後、中高生新聞編集室で
の編集会議に出席。6人も事
前に同紙を読み込んできただけ
あって、「もつと文章を柔らか
く」「英会話の例文が使えない」
など鋭い意見を連発。若者に人
気のユーチューバーやアニメの
話に中年の記者らがついていけ

た。2日目は、午前中に読売新
聞の会社見学コースに参加
し、編集局などを見学。午後
は教育ネットワーク事務局
で、読売新聞二面の人物紹介
コラム「顔」の執筆に挑戦し
た。取材対象は、本紙の名物女
性記者で、仮面ライダーなどの
特撮ファンとしてイベントも主
宰している鈴木美潮（みしほ）
委員。

6人で共同インタビューを行っ
た後、秋山哲也・元写真部長の
指導で屋外写真も撮影。「仮面
ライダーのポーズをして下さ
い！」と果敢にリクエストし、
鈴木専門委員の素顔を引き出し
た。その後、パソコンに向か
い、四苦八苦しながら原稿を執
筆。本物の「顔」と同じスタイ
ルで印刷された自分の記事を手
にし、達成感を味わっていた。



それぞれが撮影した
写真をあしらい、完
成した「顔」の記事



生徒が日本語検定を受検している
埼玉平成中学・高校。日ごろから
新聞に親しむなど日本語力の強化
に取り組んでいる

日本語検定で 「言葉」に強く

学校ぐるみで受検広がる

子どもたちの国語力を育てるために、「日本語検定」を活用する
小中高校が増えている。日本語関連の検定といえば「漢字検定」が
有名だが、「日本語検定」は、漢字はもちろん、語彙、慣用句、
敬語、文法など総合的な日本語能力を測ることができるからだ。

週1時間、検定対策の授業

埼玉平成中学・高校

埼玉県毛呂山町の私立中高一
貫校、埼玉平成中学・高校では
2012年度から、全校生徒が
日本語検定を受検している。

国語科・日本語検定担当の
島田隆教諭によると、同校は
2020年の大学入試制度改革
をにらみ、日本語、英語など「言
葉」に強い生徒を育てるための
学校改革を進めており、日本語

教育現場からビジネス界まで

日本語検定は、特定非営利活動法人「日本語検定委員会」が年に2回、
春と秋に実施している。小学2年生レベルの7級から、社会人上級レベルの
1級まで、個々のレベルに合わせて受検できる。日本語検定の級認定を入学
試験の加点や優遇条件に取り入れている大学・短大が全国で220校に
上っているほか、企業の社員研修にも取り入れられ、教育現場からビジネス
界まで幅広く活用されている。

5人以上の団体で受検する場合は、一般会場のほか、自分たちの学校
や会社の施設を受検会場とする「準会場」を選択することもできる。

日本語検定 平成29年度第2回検定(通算第22回)

- 一般会場 11月11日(土)
- 準会場 11月10日(金)、11日(土)の2日間
- 申し込み締め切り 10月13日
- ◇読売新聞専用ダイヤル ☎03・5390・7498
- ◇読売新聞専用申し込みフォーム

<https://www.nihongokentei.jp/houjin/moshikomie.php?ccd=4350>

読売新聞専用ダイヤル・フォームから申し込むと、過去1回分の検定問題
と解答・解説冊子がもらえる。

検定の導入はその一環。中1か
ら高3まで、通常の国語の授業
のほかに週1時間、日本語検定
のテキストなどを用いた検定対
策の授業を実施。昨年の高校1
年生は、全員が4級(中学卒業
程度)を取得。7割の生徒が高
校卒業程度の3級にも合格した。

「生徒1人1人が、一つでも
級を上げるために頑張ってい
く中で、『言葉』に対する意識
が変わってきているのを感じま
す。受験生やその保護者の間で

も、当校が日本語検定に力を入
れていることが知られてきて、
特長のひとつとして受け止めら
れています」と話す。

すべての教科の根幹は国語

福岡教育大学付属久留米小学校

福岡県久留米市の福岡教育
大学付属久留米小学校では
2008年度から、3年生以上
の児童が全員、日本語検定を受
検。卒業までに8割以上が4級
に合格するという。昨年11月に
実施された平成28年度第2回検
定で、団体表彰の一つ、文部科
学大臣賞を受賞した。

「本校では、すべての教科の
根幹になるのは国語だと考え、
豊かな言葉の力を育むための活
動を行っており、その力試しの
意味も込めて、日本語検定を活
用しています」と、担当の鶴本
健教諭は話す。

同校では、10分間の休み時間
のうち最後の3分間は、児童が
次の授業に備えて席につき、自
主的に学習する時間にしてお
り、日本語検定の試験日が近づ
くと、その時間に検定の問題集
などに取り組み児童も多い。

「受検後、返ってきた結果を
見て、悔しがったり、さらに上
を目指そうという気持ちになっ
たり。検定が、子どもたちの意
欲向上につながっています」

高校生のサマースクール

イノベーションキャンパス in つくば 2017

技術革新考え、交流深めた3日間

科学の奥深さや課題解決の発想などを学ぶ高校生対象のサマースクール「イノベーションキャンパス in つくば 2017」が8月9日から11日までの3日間、茨城県つくば市内の複数の会場で開かれた。全国から集まった高校生156人がグループワークなどを通して、未来をよりよくする技術革新を考えると同時に、互いの交流を深めた。

「学長」に茂木健一郎さん

4年目の今年も、「学長」に脳科学者の茂木健一郎さんが新たに着任。初日9日の開校式の学長あいさつで、最新のイノベーション事例を紹介した上で、「こんな面白い時代に生きていて、わくわくしないか」と参加の高校生たちを鼓舞した。

開校式に続いて、第1部の選択講座が開かれた。ロボットAI、ナノテク、宇宙、物理学、医療などの九つのコースで、選択講座とその後交流会だけ参加の高校生を合わせて633人が熱心に講義に聴き入った。

課題解決に向けグループワーク

2日目の10日から、第2部が本格スタート。まず午前中に、宇宙航空研究開発機構（JAXA）や産業技術総合研究所、農研機構といった、つくば市内にある五つの研究機関を見学した。午後は、各機関の研究成果を活用した社会的課題の解決法について、5〜7人1組のグループワークを行い、最終日のプレゼンテーションに備えた。

11日の最終日、アルファベットのAからYまでの25班がグループワークでまとめた解決法をプレゼンテーションした。参加者による投票と茂木学長



初日は633人の高校生が全国から集まった

■受賞チームとプレゼンテーション

最優秀賞	Vチーム	「教育改革（ノアの方舟）」
優秀賞	Gチーム	「木星で水素調達」
学長賞	Pチーム	「レーザーでがん解析」
イノベティブ賞	Bチーム	「振動音の少ないドローン」
社会貢献賞	Cチーム	「光る植物（街路灯、がん発見）」
プレゼンテーション賞	Rチーム	「生物環境調査、美術品保存」

グループワークでアイデアを出し合う高校生を、茂木健一郎学長が真剣な表情で見守る



すべての日程を終え記念撮影

を始めとした8人の審査委員の評価を合わせて各賞を決めた。その結果、動物や植物、微生物の種を集めた「ジーンバンク」をノアの方舟（ほしなふね）になぞらえ、そのクルーである将来を担う子どもたちの育成を訴えたVチームの「教育改革（ノアの方舟）」が最優秀賞に選ばれた。

イノベーションの種

最後に茂木学長が、次のように講評し、3日間の活動を締めくくった。

「イノベーションとは、今回、君たちが行ったグループワークこそが本質なのです。いろいろな種が流れこまないといノベーションは起きない。今回の経験で、そのことに気がついてもらえれば、うれしいです。つくば市という、空気のようにイノベーションの雰囲気味わえる地で、君たちの脳の中にイノベーションの種が植えつけられました。それを育てるのは君たちなのです」

最後は参加者、スタッフ全員で記念撮影した。

最優秀賞に選ばれたVチームの代表、照屋安基君（那覇国際高2年）は、「チームの仲間とコミュニケーションをとるのが楽しかった。3日間、いい経験ができました」と話していた。

「新聞タイム」のリーフレット

希望校に無料配布

読売新聞教育ネットワーク事務局は、朝学習などの隙間時間を使って新聞に親しむ「新聞タイム」のやり方を紹介した、教員向けのリーフレットを作成した。希望校に無料（郵送料は別途必要）で配布している。

子どもたちの学力が向上

「新聞タイム」は、日本新聞協会の関口修司・NIEコーディネーターが東京都北区の小学校長時代に提唱・導入した。新聞を読み、記事を選んで切り抜き、ワークシートに貼ってコメントをつけるのが基本的な活動。コメントは、記事を選んだ理由や要約、感想や意見などを記す。子どもが主体の継続的な活動で、全校児童が一齐に取り組んだ。毎週1回、15分間の活動に取り組むことで、児童たちの読む力、書く力、そして学力が向上し、ニュースへの関心も高まったという。

「新聞タイム」や「新聞の時間」など、学校によって呼び方は異なるが、実践校は全国に広がっている。日本新聞協会では「NIEタイム」と呼んでいる。日本新聞協会が2016年度の全国学力・学習状況調査の全国平均正答率と、NIEタイム（新聞タイム）を行っている小学校10校の平均正答率とを比較したところ、国語A・B、算数

A・Bのいずれも、実施校が5・9〜6・4ポイント、全国平均よりも高かった。

一時間で二時間分育つ

リーフレットを監修した関口氏は「新聞タイムは、新しい学習指導要領でうたわれた主体的・対話的で深い学びに合致する。教員が一時間かけることで、子どもたちが二時間分育つ」と話している。



「やってみよう! 新聞タイム」
A4判カラー 8ページ

希望者は、希望部数と①学校名 ②郵便番号 ③所在地 ④電話番号 ⑤担当教諭名を明記したメモ、送料分の切手（1〜2部＝140円、3〜4部＝205円、5〜7部＝250円、8〜20部＝360円）の2点を同封し、以下の宛先に申し込む。
【宛先】〒100-8055（住所不要）
読売新聞東京本社
教育ネットワーク事務局 NIE「新聞タイム」係

「21世紀活字文化プロジェクト」サイト一新

「ビブリオバトル」の発信充実

読売新聞に事務局を置く活字文化推進会議のウェブサイト「21世紀活字文化プロジェクト」が一新された。聴衆を前に参加者が本の魅力を紹介し、一番読みたいと感じた本を多数決で選ぶ書評合戦「ビブリオバトル」の情報発信に力を入れている。

同会議が主催する中学、高校、大学生大会の開催情報を掲載。7月から各地で予選会が始まった「全国高等学校ビブリオバトル」の様態を動画でも一部紹介している。

また、本選びのプロである書店員や、スポーツ選手らがイチ押しの本を紹介する「私のオススメ本」コーナーを新設。作家などを講師に招き、大学などで開催してきた「読書教養講座」「活字文化公開講座」のアーカイブコーナーも。ウェブサイトは <http://katsuji.yomiuri.co.jp/>



海外で学ぶ・リレーエッセー ③2

仏ニューヨーク大学パリ校 「フランスからビズー（キス）」

モントクレア高校（采ネージャージー州）卒・ニューヨーク大学パリ校3年（執筆時）

中山 桃子 さん



フランス語で「ドゥー・ヴィアン・テユ?」。「どこから来たの?」と聞かれると私は「留学先の大学から留学してきている」と答える。

大阪に生まれ、人生の3分の2を米国で育ち、今はパリで大学3年目。世界中に14のキャンパスがあるニューヨーク大学（NYU）は海外で学ぶコースがあり、それをフル活用している。

ニューヨーク大学 パリ校

全米最大級の私学ニューヨーク大学のパリにある学術センター。NYUパリでの講義はフランス語と英語で行われる。



幸運すぎるくらいだが、これがNYU進学理由の一つでもあった。

パリに来る前、私は、留学とは自分を再発見し、変身してあわよくば新しい自分になれるかもしれない、という前提条件が気に入っていた。ニューヨークでの過去2年間は政治学、国際人権法、哲学を学んだ。これらグローバル・リベラル・スタディーの専攻を進めていく上でパリは理想的だった。ヨーロッパの視点で捉えなおし、違った視野も開けそうだからだ。1年間のパリ留学を終えたら、フランス語を流暢に話し、新しい考え方を持って、世界に対する全く違った理解をしてシャルルドゴール空港を後にしたい。要するに分別があつて、教養のついた自分だ。

パリでの過去4か月の体験はすばらしかった。NYUと提携関係がある、通称シアンスポと呼ばれる特別高等教育機関、パリ政治学院やパリ第1大学（通

称パンテオン・ソルボンヌ）での経験で自分の抱いていた国民性の概念は粉々に打ち砕かれた。フランスの共和主義、ライシテと呼ばれる政教分離原則に関する、同じ学寮のモロッコ、ギリシャ出身の友達との熱い議論は刺激的で、しばしば未明の午前3時まで続き、畏怖の念を感じたほどだった。ヨーロッパ諸国同士の近接さもいい。ことば、文化の異なる違う国に週末、列車で出かけることができるからだ。

様々な学問を取捨選択して学びたい、という野心は膨らむ一方、留学が自分の人生を何か違うものにするということではない、ということも理解した。ラ・ヴィル・リュミエール、光の都（パリのこと）を知り尽くすのに、1年では十分ではないこともわかっている。私の日本語なまりのフランス語は外国人丸出しだ。見知らぬ人にさえ、ビズー・ビズーというフランス人が好きな（ハグしながら頬と



学友との旅行先、マルセイユで（中央）＝本人提供

頬を合わせるあいさつ）習慣には未だに馴染めない。だが、留学したからといって完全に同化する必要はない、ということも理解するようになった。心地よい方向感覚の喪失とでもいえよう。まだあと1学期過ぎることになる。パリがわたしのために用意してくれることを楽しみにしている。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2017年1月29日）

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

英語の原文は <http://the-japan-news.com/news/article/0003432425> でお読みいただけます。

参加者募集 セミナー

「大学の實力」 を読み解く

偏差値で 選んでいいの？

全国692大学の最新データを満載した『大学の實力2018』の出版を記念して、「大学を偏差値で選んでいいの？」をテーマにセミナーを開きます。進学に関心をもつ中高生や保護者、教員のみならず、ぜひご参加下さい。

9月30日(土)

14:00 ~ 16:30

読売新聞東京本社にて

(東京都千代田区大手町1-7-1)

■講演 塩瀬隆之 (京都大学准教授)

■ワークショップ 大学の實力バイキング



塩瀬隆之
京都大学准教授



■定員 先着100人

■参加料 1500円 (『大学の實力2018』をプレゼント)。親子2人の参加は1人分まで可。

■応募 メールで下記の教育ネットワーク事務局のアドレスまでお申し込みください。件名を「セミナー応募」とし、氏名(親子の場合は連記)、ふりがな、職業(学校名)、電話番号を明記してください。

宛先: t-manabu@yomiuri.com

■期限 9月24日 ※定員に達し次第、締め切ることがあります。

■詳細 <http://kyoiku.yomiuri.co.jp/nwnews/contents/930.php>



大学の實力2018

中央公論新社、1,782円(税込み)

9月25日発売

新年度版出版記念!

応募のメールはこちらから→

